

授業で使える当館所蔵地図

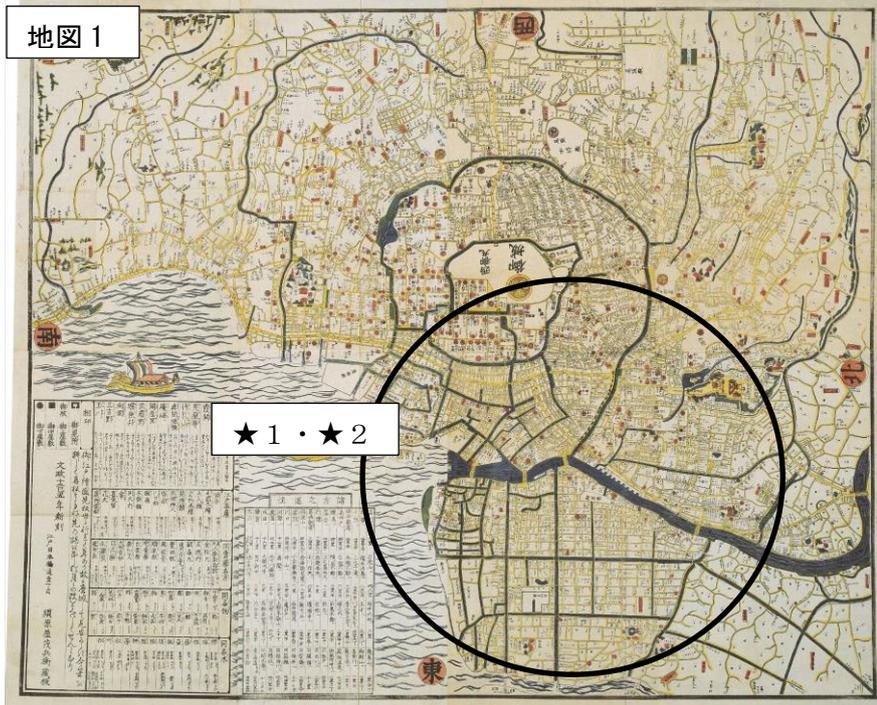
No. 47 地図1『文政改正江戸大絵図』, 地図2『長禄江戸之絵図』

作成年: 地図1: 1829 (文政12) 年 地図2: 1847 (弘化4) 年

サイズ: 地図1: 87×107cm 地図2: 71×76cm

作者: 地図1: 須原屋茂兵衛 (蔵版) 地図2: 太田時利 (秘書)

地図1



【解説】地図1

西を上にしたこの地図は、文政年間(1818~1830年)の江戸中心部を表したものである。この地図には、当時の交通の様子、武家地や町人地といった居住地や居住者の名称まで詳細に記されている。

江戸城を中心に広い範囲にわたって、堀や運河が整備されたことが確認できる。堀には、多数の橋と御門がつくられている。河川が枝分かれして直線に伸びている水の流れは、開削工事によって整備された運河を示している。また、居住地を詳細にみていくと、江戸城周辺には、親藩・御三家が並び、武家地が江戸城を取り囲むように配置されていること、町人地は、物資の運搬に便利な海に近い下町にあることを読み取ることができる。

★1 運河

船舶の移動のために人工的につくられた水路。1590(天正18)年、徳川家康が江戸城入城以降、江戸湾の埋め立て工事とともに行われたのが、運河の開削工事である。江戸城を中心に渦を巻くように整備された運河は、物資の運搬や敵に攻め込まれにくいといった機能を果たした。さらに、全国の城下町に伸びる五街道と組み合わせることで、より一層、江戸に人や物が集まる効果をもたらした。

★2 御門

外堀や内堀には、多くの橋が架けられ、その内側にいくつもの御門がつくられた。江戸城の大手門のように、敵の進入を防ぐための柵形のかたちをした御門も配置された。

地図2



【解説】地図2

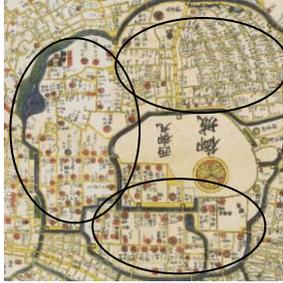
西を上にしたこの地図の中央には、室町時代の武将、太田道灌(1432~1486)が、1457(長禄元)年に築いた江戸城が描かれている。江戸時代ではなく、中世の江戸(★3)の様子を示しているものである。当時は、江戸の下町がある場所に当たる範囲は、湿地帯で、いまの銀座や築地もまだ、入海であった。

★3 中世の江戸

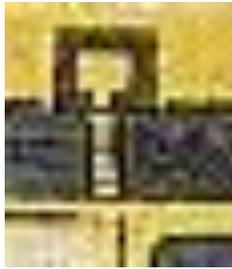
河口に近い江戸は、北関東の内陸部から水運を用いて、鎌倉・小田原・西国方面に出る中継地点となっていた。そのため、中世から、交通の要衝として発展してきたという説もある。

【活用の例】

○江戸城周囲の堀や門、武家地に着目することで、城郭都市としての機能を備えていたことをつかむ。
江戸城の周りは、攻められにくくするために、どんな工夫がされているのか問いかけることで、江戸城を囲むようにして武家地が配置してあること、堀で何重にも囲まれていること、多くの門を通らなければ、入れないようにしていることなど、城郭都市としての機能に関わる発言を引き出すようにする。



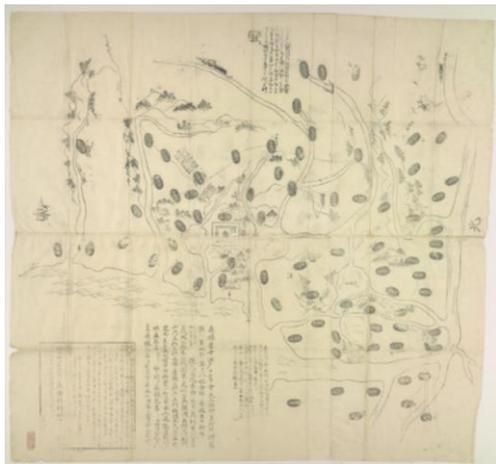
(補足説明)
上級武士や下級武士といった家臣がどこに位置しているのか、周辺の様子を解説する。



(補足説明)
江戸城の大手門を代表とする、桁形の門について解説する。桁形の空間と、門が2重にあることで、外敵の侵入を難しくし、守備側から一斉に攻撃できるようにしている。

○『長禄江戸之絵図』と比較して、交通の様子等から、江戸が発展した背景をつかむ。
江戸幕府ができる前と、できた後の川の流れを比べるように助言することで、もともと川に囲まれていた地域だったこと、直線の水路は工事で造ったものといったことに気付くことができるようにする。
また、川を生かして、運河を整えたことが、江戸が、全国から人や物が集まりやすいまちとして発展したことをつかむことができるようにする。

『長禄江戸之絵図』



『文政改正御江戸大絵図』



【比較の例】
・川の様子
・交通の様子
・土地の様子
等

